

## 宮古島市総合博物館の美術工芸資料紹介

新田 由佳（宮古島市総合博物館嘱託職員）

### はじめに

宮古島市総合博物館では、平成 24 年度より収蔵資料目録を作成し、これまでに『自然資料編』（平成 24 年度）、『歴史資料編』（平成 25 年度）、『民俗資料編』（平成 27 年度）を刊行しました。本年度の『美術工芸資料編』の刊行をもって 4 部門の資料目録が完成することになります。私は『自然資料編』、『歴史資料編』、『美術工芸資料編』の作成業務を担当し、博物館に長く眠っていた資料を数多く見ることができました。その中には、昆虫類の「ヤエヤマツダナナフシ」、皺だらけの「クルチョー」、真珠養殖に関する「中村十作直筆の書類」、當間本店の「手回し洗濯機」、戦時中、特攻艇での出撃を待つ「中尾メモ」など、貴重で資料価値の高いものが多くありました。それらは、宮古の自然や歴史の一場面を物語るものであり、その時、その場所の空気をまとっているようにも見えてきます。

今回、美術工芸資料を整理していく中でも、いくつかの古い資料の中に新しい発見がありましたのでこの場を借りてご紹介したいと思います。

『美術工芸資料編』では、収蔵資料を次のように分類しました。

A1：書、A2：絵画、A3：染織、A4：彫塑、A5：漆芸、A6：陶磁器

当初、美術工芸の未登録資料は種類も点数も少ないと思われましたが、絵画や陶磁器は眠っていた資料が思いの外多くありました。各分類の点数は、A1：書 1 点、A2：絵画 106 件 129 点、A3：染織 24 件 175 点、A4：彫塑 1 点、A5：漆芸 3 点、A6：陶磁器 220 件 222 点でした。これは寄託資料を除いた点数です。

### 1. 宮原昌茂とネットオークション

宮原昌茂と言えば、博物館第 2 展示室に常設展示されている蔵元周辺の絵画 4 点はよくご覧になっていると思います。これらは晩年に描かれており、また幼少期の記憶を頼りにしているためか、やや平面的な印象を受けますが、それがまた独特の魅力を醸し出していると思われれます。博物館の収蔵庫には、展示作品以外に油彩画 42 点とパステル画 10 点、スケッチブックに書かれた雑記が 12 枚あります。2001（平成 13）年度に開催された第 41 回企画展「宮原昌茂展」において公開されているのでご覧になった方も多いと思います。そのほとんどがキャンバスに油彩で描かれているのですが、2 枚だけ板に描かれているものがあります。

その板に描かれた2枚の絵にはそれぞれ裏面にも油彩画が隠れていました。女性を描いた作品(図1)の裏には観音像(図2)、裸婦を描いた作品(図3)の裏には、カニ(図4)が描かれています。どちらも若々しい力強さを感じる鮮やかな色彩です。



図1 (表)  
宮原昌茂 (無題)  
1953年 40.9×31.8  
油彩、板



図2 (裏)  
宮原昌茂 (無題)  
制作年不明 40.9×31.8  
油彩、板



図3 (表)  
宮原昌茂 (無題)  
制作年不明 40.7×31.3  
油彩、板



図4 (裏)  
宮原昌茂 (無題) 制作年不明  
40.7×31.3 油彩、板

また、スケッチブックに書かれた雑記の中には、これまで関わりのあった人たちへの感謝の言葉や、亡くなった奥様への思いが綴られています。これは旧平良市の広報紙にて、当時ご本人に会いに京都まで赴いた根間郁乃氏が少し触れています。

さて、根間氏は昨年、インターネットのオークションサイトで宮原昌茂の絵画が出品されているのを発見し、落札しました。それは卓上の水差しやグラスが日射しに照らされた絵で、宮原昌茂の魅力が凝縮したような、穏やかな印象を受けます（図5）。昨年末に惜しまれつつ閉館した市立図書館北分館の1階に飾られ、静かな空間に寄り添うように柔らかい空気を作り出していました。



図5 宮原昌茂  
北分館に展示されていた作品

目録作成に向け、絵画を点検していたある日、共同作業者の亀山が宮原昌茂の絵のサインが「M. M」だと気づきました。まだ2001（平成13）年度の「宮原昌茂展」で仲宗根将二氏がお書きになった挨拶文のパネルを確認していなかったため、「M. M」のサインを見て違和感がありました。そこで私は根間氏に、もしかして「みやはらしょうも」ではなくて「みやはらまさしげ」ですか、と問い合わせました。私が問い合わせた後、根間氏はたまたま恩師の友利昭子氏と会い、その際に宮原昌茂について調べてみるといい、と助

言を受けたそうです。同じ日にまったく別のところから、同じ人物の名前を聞いた根間氏は、なんとなく「宮原昌茂」とインターネット検索したところ、宮原昌茂の絵がオークションに出品されていることがわかったそうです。根間氏によって落札されたその絵は京都で描かれたかもしれません。ですが、その絵が宮古に帰りがっているとしたか思えないような不思議な巡り合わせでした。

## 2. 「二季会」の画家たち

このたびの目録は、平成28・29年度の2年間で整理、編集作業を進めてきましたが、その前年の27年度は比較的自由度高く調査する時間をいただきました。その年には県立博物館・美術館の元美術館副館長、瑞慶山昇氏が美術館在籍中、「二季会」について調査されたことを教えていただき、また、市民文化祭では文化協会美術部が下地明増、本村恵清、池村恒仁らの絵画を展示した際に少し関わることができました。「二季会」はその誕生や変遷について知れば知るほど興味深く、宮古において現在のように美術が盛んになったのもすべてここから始まったのだと思われます。



図6 下地明増 「石段のある風景」  
制作年不明 162.1×130.3  
油彩、板

「二季会」は1956(昭和31)年に創立された絵画サークルです。当初は「宮古美術同人会」としてスタートしました。創立当初のメンバーは、<sup>\*1</sup>下地明増(38歳)、本村恵清(36歳)、平野長伴(36歳)、池村恒仁(35歳)、大宜見猛(31歳)、下地充(26歳)、川満進(23歳)でしたが、池村恒仁は第2回の展覧会から作品を出品しています。彼らは旧制宮古中学(今の宮古高校)時代、篠原鳳作や敬徳健という図画教師に絵画への情熱を育まれました。俳人として有名な篠原鳳作は、旧制宮中では英語と公民の教師として教壇に立っていました。しかし図画教師の欠員が出て(前任の図画担当は宮原昌茂)、経験の無い篠原が7ヶ月間図画を指導することになり、その年に入学したのが下地明増でした。また、篠原鳳作の後任で図画を教えたのは敬徳健で、学校内で展覧会を開くなど非常に熱心に指導したそうです。瑞慶山氏が収集した当時の展覧会場での集合写真を見せていただきましたが、戦争の足音が刻一刻と迫る時代に、教室内で脚にゲートルを巻いた学生たちがずらりと並び、その後ろの壁にはドレスを着た少女の絵など西洋風の絵画が多数展示されていました。そのような西洋画を描いても許される環境にあり、旧制宮中の学生たちは恵まれていたのだと思います。<sup>\*2</sup>1938(昭和13)年4月~1939(昭和14)年3月頃の写真だと思われます。

博物館には下地明増、本村恵清の絵画作品が寄贈、寄託され、池村恒仁作品はご遺族から、下地充氏の絵画はご本人よりご寄贈いただきました。瑞慶山氏が十分に調査されている「二季会」ですが、私も本島に出張の機会がありましたので、「二季会」創立メンバーである大宜見猛氏にお目にかかり、お話を伺ってきました。大宜見氏は1959年に100号油彩画の大作「崖」で第11回沖展に入賞しています。しかし現在は絵から離れて、古代史研究に専念しておられるそうで、描いた絵もほとんど人にあげてしまったそうです。お宅には2枚の絵だけが残っていて、奥様の横顔を描いた作品(図8)はとても美しい肖像画でした。

また、同じく創立メンバーの下地充氏にもお話を伺いました。

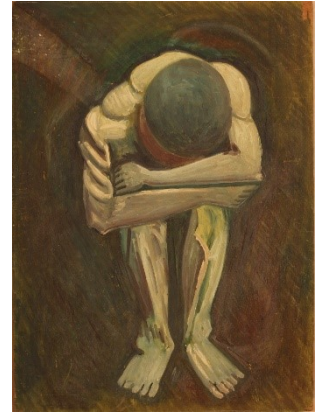


図7 本村恵清 (無題)  
制作年不明 40.7×31.3  
油彩、板



図8 大宜見猛 (肖像画)  
制作年不明

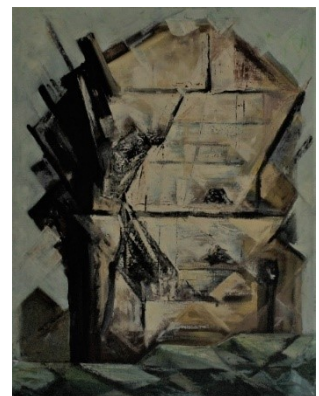


図9 下地充 「戦後のつめあと」  
制作年不明 92.5×72.3  
油彩、キャンバス

下地氏はメンバーの中でも2番目に若く、ご本人曰く、「二季会」では先輩の言うことを「はい」と聞くばかりだったそうです。第12回沖展では「二季会」から出品した7人全員が入選していますが、下地氏の「戦後のつめあと」(図9)もそのうちの1作で、この貴重な作品を博物館に寄贈していただきました。下地氏は淡々と穏やかに話されていましたが、「戦後のつめあと」が描かれた背景には、戦中、戦後とご苦労されたことがあったようです。

戦時中、すでに父を亡くされていた下地氏は、母、妹とともに宮崎に疎開しました。宮崎では郊外に住んでいたため、中心部ほど食料に困るということにはなかったようですが、母は戦時中に子ども二人を育てるためご苦労なさいました。大阪に住んでいた親戚が熊本に疎開してきたため、下地氏たちも熊本に移ろうとしましたが、その移動中に終戦の報せを聞きません。そしてその後、親戚の家のようにすを見に行くため大阪に移動しましたが、道中で広島原爆のあとを見、大阪では辺り一面の焼け野原も見たそうです。大阪に一泊してから宮古に戻ると、下地氏は愕然としました。家族が暮らしていた家が跡形もなくなっていたのです。戦時中、下地家前の家を日本軍の曹長たちが接収しており、空襲を避けるために周りの建物を壊してしまったそうです。

その後教職に就いた下地氏は子どもたちに写生を指導しながら自身も絵を描き続け、戦後に見た風景を見事な抽象画で表現しました。それがこの「戦後のつめあと」です。

### 3. 大切に使われていた小櫃

博物館の収蔵庫には、大きな衣装箱がいくつかありました。「ピツ」とメモがされたその衣装箱は、おそらく漆製品であったらうと辛うじて判るといった程度に状態が悪く、大型で重いため、持ち運ぶだけでその塗装がぼろぼろと落ちるものもあります。私たちではどうにも判別がつかない資料だと思われたので、美術工芸品、中でも漆製品に造詣の深い稲福政齊氏にご来館いただきました。

まず、ひとつ小型の櫃があり、事前に確認したところ三つ巴の紋が施されていることがわかりました。三つ巴紋といえば、尚家の家紋です。稲福氏に実際に見ていただいたところ、確かに尚家の家紋だと思われる、と鑑定していただきました。資料名を「朱漆左三つ巴紋葡萄箔絵小櫃」(図10)とするその櫃は、ほぼ同型のものが東京のサントリー美術館にも収蔵されているようで、この資料の価値の高さがうかがえます。稲福氏の調査所見によると、「蓋、身、掛子かけごからなる木製指物の櫃きしもの。部材の接合には竹釘を用いる。表は朱漆塗、内



しゅうるしひだりみつどもえもんぶどうはくえこびつ  
図10 朱漆左三つ巴紋葡萄箔絵小櫃  
高さ 36.1 奥行 33.1 幅 52.5

部と底裏、掛子は黒漆塗。蓋身に銅合金鍛造<sup>どうごうきんたんぞう</sup>の蝶番金具と開き止め金具、錠金具、身側面に同じく銅合金鍛造<sup>どうごうきんたんぞう</sup>の提鑲金具<sup>さげかんかなぐ</sup>を付す。蓋表、蓋鬘<sup>ふたかづら</sup>及び身側面には箔絵により葡萄文を施す。蓋肩部には隅に七宝繫文<sup>しっぽうつなぎもん</sup>の痕跡を認めるが、主文は摩滅のため不明。箔絵による左三つ巴紋を、蓋表に2（現状ではほぼ摩滅）、身前面、身側面に各1表す。蓋身の内側は無文。蓋身の角部分や身外側の暈付近を中心に塗膜の剥落がみられ、特に蓋の文様の摩滅が著しく、金具の欠失もあるなど、状態からみて実際にかかなり使用されたものと思われる。類品に、サントリ美術館所蔵の朱漆巴紋葡萄箔絵櫃（『琉球漆工藝』：265）がある。」ということです。

じっくりと資料を見ていると、蓋の箔絵がずいぶんと禿げています。想像するに持ち主の女性が簪などの大切な宝物を入れ、そっと閉じた蓋を愛でるように撫でていたのではないかと思うのです。内部は上げ底で黒漆が塗られ、下地の布はおそらく苧麻、釘はすべて竹釘です。箔絵による装飾は非常に細かく、全体としては葡萄文、隅には七宝繫文が施されています。葡萄文も七宝繫紋も吉祥文で縁起が良く、この小櫃が嫁入り道具だったのではないかと思います。葡萄と栗鼠<sup>りす</sup>を組み合わせた文様は子孫繁栄の吉祥文としてよく用いられる意匠ですが、葡萄だけの文様というのが却ってこの資料の珍しさを物語っているとのことです。

あと3点、大型の櫃がありますが、うち2点は状態さえよければ美術品としての価値が高いとのことでした。もうひとつの櫃は船に積んで家財道具を運ぶためのもので、船の揺れから荷物を守るためにすべての角に鋳が打たれており、頑丈に作られています。

#### 4. 「錫直し」された瓶

未整理の陶磁器資料も専門家の方々に同定を依頼しました。沖縄県立埋蔵文化財センターの新垣力氏、那覇市立壺屋焼物博物館の倉成多郎氏、そして金武正紀氏です。それぞれ中国産陶磁器や壺屋焼、八重山産陶器などご専門がおありだったので3人の方々に資料を見ていただいたことは幸いで、それぞれのご意見をすり合わせて一つ一つの資料に名前をつけていきました。

その中に染付玉壺春瓶（牡丹唐草文）（図11）という瓶があります。私は焼物についてまったく不勉強で、その瓶の首部に付いている金属の意味が分かりませんでした。口縁部も欠損しており、資料としての価値があるのかどうかも分かりません。しかしこれを見ていただいたときに分かっ



図11  
そのめつけぎよっこしゆんびん  
染付玉壺春瓶（牡丹唐草文）

中国 景德鎮窯 15世紀（明代）  
高さ36.1 奥行33.1 幅52.5

たことは、その金属が錫であり、欠損した口縁部を修繕するためのものであるということ、そしてそれが、この資料が15世紀の明代に作られた根拠となるということでした。この染付の瓶にどれほどの価値があるのかは分かりませんが、文様も美しく、完品であればどこに出しても恥ずかしくないような佇まいをしています。しかし完品ではないものの、錫で直してあるところにこの瓶の出自が示されているということに面白みを感じました。

陶磁器資料の整理全体をとおして、土、釉薬はもとより、その文様や形などさまざまな特徴からそれがいつどこで作られたか、どのようなルートで宮古にやってきたのか、また、それが収集された場所からそれがどのように使われてきたのかが解明されていき、名前がつけられていく過程はとても興味深いものでした。

## おわりに

このたびの収蔵資料目録の作成で、すべての美術工芸資料を一点一点見ることができ、また専門家の方々のご意見を聞くことができました。その結果、当博物館には数多くの貴重な資料があるということ、またそれを大切に保管し、展示公開することで市民や利用者還元することが博物館の責務であるということをも再認識しました。美術工芸資料の目録作成にあたって、資料を点検、整理できたことは貴重な経験となりました。調査にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

※1 ( ) 内は「二季会」創立時の年齢。

※2 瑞慶山氏が写真をズームアップし池村恒仁や平野長伴の学年章により推察。

文中で作者の敬称は省略させていただきました。

## 参考文献

### 瑞慶山昇

(2013)「宮古島の絵画同人「二季会」の画家Ⅰ—下地明増と本村恵清—」、『沖縄県立博物館・美術館 美術館研究紀要 第3号』pp. 9-43

(2014)「宮古島の絵画同人「二季会」の画家Ⅱ—平野長伴—」、『沖縄県立博物館・美術館 美術館研究紀要 第4号』

### 幸地郁乃

(2001)「特集 102歳の画家・宮原昌茂」、『広報ひらら No.434』2001.7月, pp. 4-6

### 荒川浩和・徳川義宣

(1977)『琉球漆工藝』日本経済新聞社

